

芥川だより

発行日 * 2020年3月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

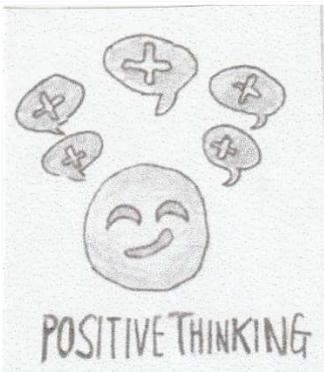
尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****

楽観的に考える



退院、1カ月後から婆ちゃんの介護を始めた。私の体調も十分回復しておらず不安で、介護施設の方も「無理をしないで下さいね」と心配してくださった。自分の不注意でこれまで続けてきた婆ちゃんの介護を放棄することに自責の思いが強かったのもあるが、ロングステイは職員が少ないためにリハビリなどの訓練が出来ず、一日車椅子に座ってテレビを見ているような状態で体の筋肉が落ちていく、3日間ほどのステイでも立つ力が落ちる。その点デイは朝の迎えから、入浴、脳トレ、カラオケ、リハビリと忙しく活気がある生活だ。

婆ちゃんの介護で一番重要なのは排便である。何とか便座に座らせ用を済ませてもらう。この時に最低20秒は立てないと紙パンツやズボンの着替えが出来ない。歩けなくても立てる力がないと寝たきりになってしまう。

1カ月間のステイで婆ちゃんの筋肉が落ちて立てないかもしれない心配が強かった。送迎されてきた婆ちゃんを見て、「こりゃ、大変だ!」と思ったが、何とかしなければいけない。翌日からデイが始まるので、「頑張らな」と思うが婆ちゃんは筋肉が落ちたかズシリと重い。健康な人でも1カ月ベッドで寝ていたら歩けなくなる。私も体力は1週間で半分になった。

途方にくれそうになった時に、台所の横に貼ってある古ぼけた張り紙、ストレスに弱い「こころのくせ」を見た。本誌に寄稿された精神科医の伊藤さんの文である。落ち込んだ時に見るために目につきやすい所に貼っていたのだ。

その内容は、1、他人との比較・競争。2、全か無か(0か100か)。3、「すべき」思想。4、悪い方向ばかりに考えてしまう。5、結論の飛躍(将来を悪く決めつけてしまう「自分の人生にはもうよいことがない」など)

あらためて読み直すと私が置かれている状況と同じだ。「これじゃ、いかん!」と思いなおして、家内の協力も得ながら、家庭内リハビリも少しずつ始め時間をかけて婆ちゃんの筋肉アップをやっています。あまり先の事は考えず、楽しく今やれることをやっといこうと思っています。

死をめぐるあれやこれ(64)

ショックドクトリンを記憶しよう

石川 吾郎

新型コロナウイルス感染については問題が多すぎるので、ここではその裏で同時進行をする問題について取りあげる。社会を揺るがす事件や災害などに人々の目が奪われている混乱に紛れて、ないしその裏でひっそりと、権力がとんでもないことを推し進める政治手法が「ショックドクトリン」というものだ。◆最も有名なものは、九・一一の後に、ありもしない核兵器の存在を名目にして、見る間にイラク戦争へと突き進んでいった米国の例がある。小さな例では有名人の違法薬物使用が派手に報道される裏に、政権中枢の不正やスキャンダルがひっそり伝えられる、ないしは隠される。

今回の新型コロナウイルス感染の「危機」を理由として、政府は「緊急事態宣言」を可能とするような法案を成立させようとしていると報道されている。これは集会、言論、表現、移動の自由など基本的人権を、感染症などを名目に制限するものになる。警戒すべきは、この中に政権維持のため、民主主義的手続きの抜け穴となる、政府に有利な条項を忍び込ませるだろう、ということ。そもそも「緊急事態条項」は「ナチスの手口」として有名で、自民党の改憲案の中心部分をなしている。

(裏に続く)

安倍政権下での改憲は絶望的な状況になってきたので、それに近い内容の緊急事態宣言は安倍政権には願ったり叶ったりとなるだろう。◆実はこれだけではなく、ほとんど報道されないが種苗法が改悪され、種子の自家採取の禁止、遺伝子組み換え食品の表示を不可能にするといった、この国の食の安全を米国穀物メジャーのために破壊する事態が進行していることも、知っていたらきたい(前衆議院議員の山田正彦氏のブログを参照)。◆我々国民は、このショックドクトリンの語を思い出しつつ、ニュースを注視する必要がある。

芥川だより一五八号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 72	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 22	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 30	下村嘉明	6
大人の今昔物語 65	石川吾郎	6
B級サラリーマン渡世譚 80	明石幸次郎	7
オクラの山たより 42	囚丁生	9
隠された歴史 17	満田正賢	13
道を行く 11	成瀬和之	16
編集後記	嘉	17
ふみの道草 21	山椒魚	18
俳句	土田裕	18
	影山武司	18

素老人☆よもだ帳 (72)

坂本一光

◆野蛮で強烈 近代俳句の最高峰

二〇一八年度俳人協会評論賞を受賞した青木亮人・愛媛大学准教授は、自著『近代俳句の諸相・正岡子規・高浜虚子・山口誓子など』(創風社出版、二〇一八年)を紹介する文にこんな殺し文句のような表題をつけた。俳句には素人でも、読んでみたくなるのではないか。しかし、そのことに触れるのは後ししよう。

大分県現代俳句協会は創立三十周年を迎え、それを記念する大分県現代俳句大会が去る三月一日、四一四句(二人三句で投句)の応募を得て開催された。現代俳句協会から中村和弘会長も駆け付け、新興俳句とは何であったかについて記念講演をした。また、応募作から会長特選句が七句選ばれ講評があった。七句は次のとおり。

鏡餅われて始まる高校生
 蠅叩き妻が私をじつと見る
 小鳥来る原爆ドームを標とし
 レタスほど晩年明るい夕べかな
 光る漁村ふらここ無人の深き揺れ
 雁鳴くや少年の日の耳赤し
 冬の月探せばふいに輝きぬ

第一句は高校一年生・合田陸翔氏の句である。甲斐素純氏の二句目など、素晴らしい川

柳だと素老人などは思ってしまう。三句目以降は、それぞれ田中 充、有村王志、有村王志、菅 攝子、飯田幸子の各氏の句である。素老人の句(復興へ桜いくたび咲いて散る)は、さまざまな賞を受けた三十六句に次ぐ奨励賞(二十句)の一つに選ばれた。

ところで、川柳では何百何千句の投句があるうとも、一般に、一人の選者(せいせい二人の共選)が入選句や特選を決める(投句者から見ると「抜ける」という)。一方、素老人が知る俳句の大会では、特別に選ばれた経験豊富な選者たちに加えて一般投句者も選をする。選の結果は、誰がどの句を選んだかを明記した二覧表にして配布され公表される。俳句では、小さな句会でも参加者による互選が行われると聞いた。だから、例えば金子兜太が主宰する句会で兜太の句が選ばれないこともあった、ということだ。実に面白い。

さて会長の講演を聴き、新興俳句運動に興味を持ち早速、現代俳句協会青年部・編『新興俳句アンソロジー』(ふらんす堂、二〇一八年)を購入した。その話は次の機会に譲るが、伝統と新興を分かつのは、俳句とは何かをめぐる作者の意識、立場の違いであったように思った。「俳句は俳句である」のか、「俳句は文学である」のか。禅問答のようにも思うが、川柳と俳句の違いもわかっていない素老人にそれに立ち入る資格はない。それにしても、山口誓子の(かきかりと蟻螂蜂の兒(かお)を食む)、高屋恋秋の(頭の中で白い夏野になつてゐる)、富澤赤黄男

の(蝶墜ちて大音響の結氷期)、片山桃史の(犬あふれ屋根の上にも人死ねり)などの句を、素老人はどう読めばいいのだろうか。新興俳句運動の中では、戦争を主題とする渡邊白泉の句に、とりわけて惹きつけられるものがある。(銃後といふ不思議な町を丘で見た) (三宅坂黄套わが背より降車) (提燈を遠くもちゆきても帰る) (九段坂田園の婆汗垂り来) (戦場へ手ゆき足ゆき胴ゆけり) (赤の寡婦黄の寡婦青の寡婦寡婦寡婦) (戦争が廊下の奥に立つてゐた) などなど。これらの句を読む素老人の中では、もはや俳句と川柳の境界は見事に消える。

さて、いよいよ、『野蛮で強烈 近代俳句の最高峰』である。青木氏の評論の視点もまた、「俳句とは何か」にある。以下、氏が自ら語る『近代俳句の諸相』の紹介である。

『拙著評論集『近代俳句の諸相』が2018年度俳人協会評論賞の栄に浴した。評論やエッセイ、また学術論文等のさまざまなスタイルで俳句関連の文章をまとめる中、私が常に考えているのは「何をもち『俳句』と見なすのか」という一点である。拙著で論じた俳人を例に考えてみよう。

正岡子規や高浜虚子、中村草田男等の名前は俳句に関心があれば聞いたことがあるかもしれない。しかし、彼らが何を「俳句」と信じ、彼らの句の何が「俳句」なのか、意外に知られていない点も多いと感じる。無論、五七五の定型に季語を入れて詠めば俳句と見なされるだろう。しかし、子規や虚子

らはそれのみで俳句が成立するとは考えなかつた。例えば、虚子は『ホトトギス』雑詠欄選者として〈漂へる手袋のある運河かな〉と詠む高野素十を是とし、〈来し方や馬酔木咲く野の日のひかり〉とうたう水原秋桜子をさほど評価しなかつたのだ。

秋桜子句は春光にあふれ、馬酔木が咲き乱れる奈良の大和路を逍遙した追憶を美しく詠んだ完璧な作品だ。一方、素十句は淀んだ運河に手袋が遺品のように浮かぶさまを詠んでおり、美しい詩情は感じられず、むしろ不気味な質感だけがある。秋桜子は、他にも格調高い秀句を多々詠んでいる。〈驚来ては生簀に雪を落としけり〉〈寒鯉の美しくしてひとつ澄めり〉。一方、高野素十は次のような句群を詠んだ。〈食べてゐる牛の口より

一面火〉。高浜虚子は、素十句こそ「俳句」と讃えたのだ。

その虚子の下で句作に励んだ山口誓子は〈かりかりと蟻蜂の兒を食む〉〈木蔭より総身赤き蟻出る〉等の不気味な句を詠み、また中村草田男は〈朝さくらみどり兒に言ふさようなら〉〈すつくと狐すつくと狐日に並ぶ〉等の不思議な句を詠み続けた。彼らの指導者だった虚子は、〈鴨の嘴よりたらたらと春の泥〉〈棹の先に毛虫焼く火のよく燃ゆる〉のような句を詠む一方、〈一片の落花見送る静かな〉〈手鞠唄かなしきことをうつくしく〉と気品ある句も詠みえた俳人だった。虚子、素十、誓子、草田男等、近代俳句の傑作群には日本の伝統感や美、季節感の詩

情云々と異なる作品が多い。なぜ彼らがこれを「俳句」と信じたのか、それは虚子の先輩たる正岡子規の「写生」にある。「写生」は単なる観察ではなく、頭中の美しいイメージや先入観を裏切るような、ヌツと出現した奇妙な現実を生々しい迫力とともに詠もうとする認識だったのだ。深い思想や内容はなくとも、前触れなく現れた出来事の瞬間の迫真感を詠むという姿勢である。

近代俳句の最高峰は野蛮であり、強烈である。彼らの句集から、その生々しい世界像を体感してほしい』(しんぶん赤旗『本と話題』二〇一九年五月十九日)

〈去年今年貫く棒のごときもの〉を虚子の句と知ったとき、素老人は、勝手に描いていた虚子像が変わったと思つたものである。

青木氏の文を読みながら虚子を読まねばとまた感じたが、それよりも、正岡子規の言う「写生」について、素老人には思いもよらぬ視点があることを知った。そうして達成された野蛮で強烈な伝統俳句の最高の峰々を源流にして、新興俳句は生まれたのだらう。その運動は戦争によって潰え去ったが、地下水脈は途絶えることなく戦後の現代俳句の世界へと浸透していった。その水脈はまた、俳句に隣接する川柳の世界にも押し寄せていたように素老人には思える。もちろん、そうした歴史をたとえ意識することがなかったとしても、俳句であれ川柳であれ、詠むという、精神を外在化する行為が止むことはない。なぜなら、誰の精神も

自らを外在化することによって、そうすることによってのみ自らを実現することができるからである。さらに言えば、魂は表現されなければそれが存在するのかどうか、当人にとつてさえはつきりしないのである。俳句も川柳も、人は五七五の一句に自らの世界のすべてを、ときには大宇宙をすら映そうとする。

人間の無限十七文字になる

不思議な世界ではある。
(かたちは心であり、心はかたちになる ■
大分の素老人)

哲学爺いの時事放談 (22)

祖蔵 哲

インフォデミック

哲学リテラシー

先月二月号で書いた一月二十日に中国当局が発表した新型ウイルスの拡散はいまだ収束していない。それは全世界規模に拡散しているというパンデミック状態に近づいてきている。拡散と同時にその感染ルートや症状の科学的分析により「未知の敵」の正体が徐々に解明されても来ている。そして世界保健機関 (WHO) は二月十一日、この新型コロナウイルス

による病気の正式名称を「COVID-19」に決定したと発表した。これまで使われていた「コロナウイルス」という単語はこの病気が属するウイルス群の名称で、病気そのものを指してはいなかった。研究者らは、混乱や特定の集団または国に汚名を着せることを避けるため、正式名称を決めるよう求めていた。「名づける」つまり「未知のもの」に対して名前を付けることは、未知から既知に分類することであり、「未知」に対する「不安の感情」を「既知の理性」に変化させる役割をもつ。それにも関わらず新型コロナウイルスの拡散にともない、それを上回る勢いでフェイクニュースが世界中で大量に拡散している。世界保健機関 (WHO) はこれをインフォデミックと呼び、警戒を強めている。

1. インフォデミックとは

インフォメーション(情報)と、エピソード(疾病の流行)を組み合わせた造語であり、「情報の感情的伝達」と解釈される。現代は情報化社会であるといわれて久しいがその発展には驚くべきものがある。従来、情報というものは国家やマスコミが発信するものであるとされていたが、現在はインターネット上のSNSによって容易に個人が発信元になれる。そしてその伝達速度と範囲はウイルスの感染のそれとは比較にならないほど大である。WHOが今回問題視しているのは正しい情報の伝達ではなく、まさしく伝染

性病原ウイルスに等しく悪意のある意図的な情報である「デマ」「フェイクニュース」である。しかし同時にまた、悪意のない無意識的な「噂」「また聞き」に対してもその無意味な混乱の引き起こしに警鐘を鳴らしている。

(1) 意図的情報発信「デマ」の目的

「デマ」はドイツ語の「デマゴギー」に由来しており「意図的、扇動的なうその情報」という意味がある。

非常時の流言飛語は、人間の歴史とともに古く紀元六四年のローマ大火で「皇帝ネロが新たな都を作るために火を放った」「(当時)ローマ帝国に迫害されていた」キリスト教徒が犯人」といったが広がったように歴史上繰り返されている。日本でも近代になって一九二三年の関東大震災による社会秩序がひどい混乱に陥ったことを受けて内務省が出した戒厳令の宣告文にあった「朝鮮人が凶悪犯罪、暴動などを画策しているので注意すること」という内容をきっかけに朝鮮人や、間違われた中国人、内地人であるところの日本人(聾啞者など)が殺傷される被害が発生した。

これらの「悪意の意図」の目的とは、感情を利用しての仮想敵対者の「分断」である。これらは一般に「陰謀論」と呼ばれている。今回の代表的例は「コロナウイルス＝バイオ兵器説」である。理性よりも感情が優先する仮想敵国を作ることによって、

自国の支配を容易に行いたいとする国家はいまだに存在する。それらの国家は事実による「理性的」政治能力が欠如しているからである。感情的「正義と悪者」という過去の東西冷戦構造は彼らにとつては非常に都合がよかった。それが消滅したいま、これらの国は中国やイラン、ロシアまで、「デカプリング」(分断)したいと望んでいる。それらにとつて「ウイルス汚染」は好機である。

しかし、この意図的な情報発信は「感情」に基づいている限り、国家的なレベルだけの行為とは限らない。人間は自己が危機的な状況に被ったときにはそれを回避したいという傾向性をもつ。そしてその危機を他者に振り向けたいと願う。他者とはできるだけ自分の利益集団からは遠い人々のことである。家族、共同体、国家、宗教、民族、人種といった単位でそれは拡大していく。いわゆる自己の所属(アイデンティティー)である。それらは差別にながっていく。今回の騒動でも狭い範囲では「コロナ感染者差別」から「中国人」「アジア人」まで「偏見」が拡大されている。これらは平常時からの「差別」を「非常時の感情」を利用して拡散、「分断」を固定化しようという「意図的」な情報操作である。

(2) 理性的問題解決を阻む感情的善意情報「ガセ」

さて、悪意という意図とは別にこの

受けての感情を「商売の好機」として利用する場合もある。これが、

このように国全体が不安に襲われているような状況に際して、きまって便乗してくるのが、怪しい民間療法である。「ニンニクを食べると感染予防になる」「ゴマ油を塗ると予防できる」などがある。そのほか商売ではなく「コロナウイルスは熱に弱いのでお湯を飲んだらよくなる」とかといって類の話まで拡散している。いずれも「悪意」ではないが無意味な情報であり、結果的に不要な混乱を起こし問題解決を遅らせている。

これらの伝達が拡散される原因はやはり理性的な事実を問うのではなく、感情的行為に基づく「無意味な善意」である。これらは時に「ガセ」と呼ばれている。語源は「お騒がせ」の「ガセ」という説もあり、その意味は「偽物、まやかしのもの俗称」。単に誤った情報やうわさ話のことである。

2. 二つのデマ

「インフォデミック」つまり悪意であれ、善意であれ感情に基づく情報発信、拡散は結果的に「理性的判断」による問題解決を妨害する。「感情的伝染」はある意味、現代社会での「インターネット空間」における伝達ゲームである。その感情は「言葉」によって伝染するのだ。私たちはこの情報伝達ゲームの空間にあり、ある時は情報の受け手になり、ある時は情報の発信者になる。情報通信の発達は、これまでに

なく風説を広げやすくしている。そのため、WHOのデジタル部門責任者は二月中旬には情報通信大手の各社と相次いで会合を開き、「科学に基づかない」情報の拡散防止に協力を求めたという。具体的には、新型コロナについて検索すると公的機関が発信する情報が上位にくるよう設定したり、投稿に対する第三者機関のファクトチェックを強化しているという。とはいえ、インフォデミックの抑制には、情報の管理者だけでなく受け手にもデマに振り回されないための対策が必要である。デマと一口にいても、大きく二つに分けられる。事実が確認できるデマとそれができないデマである。

(1) 事実確認ができるデマ

トイレットペーパー騒ぎのように「本当かどうかを確認できるデマ」に関しては、これだけ情報ツールが発達した現代では、対策は比較的簡単に情報を「クロスチェック」すればよい。具体的には「公的機関の一時情報による」「情報源の信頼性を確認する」「複数の情報源を対比する」などである。注意すべきは人での一対一時であろう。「感情」に支配されやすい人間は普段から信頼する、家族や親しい友人、そしてSNSを通じての近しいグループなどから得た情報は無条件に信用する傾向をもつ。しかし、意識、無意識にかかわらず人間は誤りおかすという前提に立って、理性的に判断することも必要

であろう。トイレットペーパーを買い集めている人のなかには、デマと分かっているにもかかわらず、「多くの人がデマを信じて買い占めが発生するかも」と心配して必要以上に買ったという人もいるだろう。それは「十分に在庫はある」という客観的事実「理性」を信用するのではなく、結果的には「感情支配」のデマに振り回されているのと同じことである。新型コロナそのものの個人レベルの対策として手洗いなど、基本的な予防が大事になると同じく、インフォデミックには情報の「クロスチェック」というごく初歩的な対策をするのが最も重要といえる。

(2) 事実確認できないデマ「科学的とは何か」

一方、「新型コロナウィルスは中国の研究所で作られた」といった「本当かどうかを確認できないデマ」は先の「クロスチェック」ができない。しかし、そもそもこれらの陰謀論には「本当だと証明できない」と同時に「ウソだと証明もできない」という特徴がある。これが陰謀論の決定的な欠陥である。「科学的」でない、ということだ。では「科学的とは何か」。ここでは科学が哲学的に「事実とはどのような方法によって得られるのか」という議論が関係する。

二十世紀初頭の哲学者の一人、カール・ポパーによると、科学とは新たな知見がどんどん積み重なるもので、かつて真実

と思われていたこと（地球ではなく太陽が回っている「など」）が、その後の観測などによってひっくり返される（反証される）ことは珍しくなく、むしろこの反証可能性をもった説こそ科学的となる。

疑似科学と科学の間の境界の設定を科学哲学の中心課題として認識した。それまでの科学は「論理実証主義」の立場に立ち、数学的な経験主義と論理・言語的な構成知識の合理主義を融合させた証拠を実験によって確認することが必要だとされていた。つまり、「なんであるか」という命題の意味を検証するために理論構成にその主眼がおかれていた。しかしポパーは、問題の所在が、「意味性」ではなく、科学性と非科学性を分け隔てるどころの「方法性」にこそある、と主張したのである。反証されえない理論は科学的ではない、というのがポパーの考えである。

この観点からみれば、「これこそ真実」と断定する陰謀論は「そうではない可能性」を否定しているため、もはや宗教に近くなる。宗教とは「非合理ゆえにわれ信ず」というように、根本的には「感情」優先である。

したがって、どんな荒唐無稽な情報でも、それを信じるか信じないかが分かれ目になる。それを信じる人にとっては「真実」かもしれないが、それ以外の人にとっては全く生産的でない。ただ単に感情移入できるかどうかだけである。

新型コロナに見舞われた世界では、W

H Oや各国政府の危機管理能力が問われている。しかし、感染の拡大を防ぐためには、公的機関だけでなく市民の協力が欠かせない。その意味で、新型コロナの拡大は、情報を取捨選択する市民の「リテラシー」も問うているのである。

3、リテラシー

近年ビジネスシーンよくリテラシーという言葉が使われている。また現代ならではの「リテラシー」である「メディアリテラシー」「ITリテラシー」などの言葉も次々に登場してきている。

日本語の「リテラシー」は、英語「literacy」が由来である。英語の意味は「読み書きの能力」、「識字」「識字率」という日本語と同義だ。だが、日本語で「リテラシー」というと原義の「読み書き能力」での使用でなく「特定の分野の知識を指すようになってきている。代表的な例だと「メディア・リテラシー」などがある。メディアつまり新聞やテレビニュース、ネットニュースに対する知見のことを指すが、メディアに対する知識だけではなく、それらの知識を仕事で活用したり、自分自身にとって必要な情報だけを利用することを判断したりする能力まで含めて「メディアリテラシー」というようになってきている。つまり特定分野の単なる知識を指すことになってしまっている。本来のリテラシーの定義は「読み」（受信）と「書き」（発信）である。そしてす

でに述べているが現代は情報受信者と発信者は同一の個人である。そこで重要なのがその個人が情報の「真偽」を判断するというところに重点がある。ただ単に仕事に役立つ情報だけを収集するとか、いち早く情報を流せるといったことが「リテラシー」ではないはずである。「読み書き」は何を目的としてするのか、現代はそこが抜け落ちている。

(2) 科学リテラシーと哲学リテラシー

結論を先にいうと、科学的思考法と哲学的思考法の違いは、科学の目標が「未知の探究」であるのに対し、哲学の目標は「既知の探究」にはかならない。自然科学が次々に未知を既知に転換し、科学は現在も「新型コロナウィルス」をはじめとする未知の物に挑戦し続けていることは言うまでもない。その意味で、科学は実験・観察による経験的実証を基盤にしながら水平方向へ知識の版図を拡張する営みである。しかし、それに対して、哲学的探究の主題は、プラトンの対話篇「このかた、ほとんど変化していない。真、正義、善愛、徳知識、存在といった、いわば「既知の事柄」である。

今回のテーマの場合は「情報とはなにか」「事実とはなにか」「真実とはなにか」である。科学リテラシーでは覆うことのできない哲学リテラシー、つまり専門家の常識を問い直す「批判的判断力」を要求することこれが哲学の使命である。

先月号でも書いたが「感情」の始まりは「驚き」であった。デカルトは「情念論」で以下のように記している。『未知の物に対する驚きは、それが正しく使われると「興味」になりそれを知りたいという「動機」になる。しかし、過剰な驚きの感情はその行為を妨害する。逆に驚きが習慣化する」と「無意味」になる。』今から四〇〇年以上前に生きた哲学者が言っていることが、現代もそっくり当てはまっている。それほど「哲学の問い」は普遍である。

大峯奥駈道(30)

下村嘉明

身長は160センチぐらい、体重は50キロほどの小柄な戸田さんは、一見すると普通の爺さんである。年齢を聞かないと60才位かなと思う明るく快活な物事にこだわらない性格で、とても大それた挑戦をやるような人には見えない。

知り合って間もない時に、気楽そうに歩いておられるので「お金は、どうされているんですか？」と聞くと「何とかなるでしょう」と言われた。昔の事を聞いても返事は無い。もうどうでもいい事だったのだろう。今が問題だったのだ。

挑戦を始められた次の日、私の店先で立ち話をした。

「調子は如何ですか」

「まあ、何とかなるでしょう」

「ホテルには、泊まられないのですか」

「米原までは、家で寝泊まりしようと思つて計画したのだが、これがなかなか大変だ。独居老人なので、計画通り歩いて近くの駅から高槻まで電車に乗り、家に帰り、洗濯、炊事、掃除などをするとぐったりと疲れる。翌朝も早く起き食事をして家の戸締りをして、昨日の到達点の駅まで電車で行き歩きを開始する。米原からはビジネスホテルに予約してあるので少しは楽になるはずだ」

私は、びつくりした。私もせめて1キロでもお供をして歩きたかったが、仕事と体力を考えてやめることにした。30キロ真夏の日中を歩き続け、その上、高槻駅から南平台の自宅まで、また歩く。なんとという根性だ！88才の爺さんの考える事か！

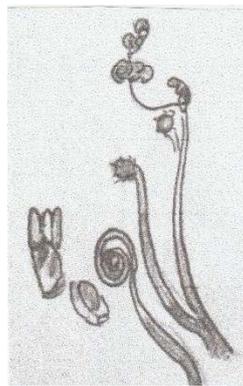
しかし、この計画は決して思い付きのものではない。毎日40キロを歩き続けた自信の結果なのである。雨が降っても雪が降っても歩き続けて体力を維持され医者からガンを告知されても気に留めず歩き続ける強靱な精神。

何度も立ち話をする機会があったが、深く話し込むことはなかった。あくまでも推測なのだが、私の想像を超えた「超人」と言える。富士山登頂回数が2千回という「鉄人」實川欣伸さんとも親交があったので、ヒルトンホテルでのパーテ

ィーで挨拶され「自分が一番尊敬しているのは戸田巽さんです。すごい人です」と絶賛された。

私も、山の先輩らに戸田さんの話をした時に、「そんなマネは誰も出来ん」と一蹴されたことがある。

だいたい88歳まで生きられるか分らんし、生きていても歩けるか分らん。普通の人は、考える事すらしらない。まして実行する人など……。



大人の今昔物語(六五)

石川 吾郎

今回は、勃興期の武士階級の気概を伝えるエピソードです。教科書に出ない度は一／五。

藤原親孝、盗人のために人質を捕えられ、頼信の言葉によって許した話(巻二五第十一)

今は昔、河内の守・源頼信が、上野の守

としてその任国にいたとき、その乳兄弟である兵衛の尉・藤原親孝という者がいた。これも優れた武人であったが、頼信とともにこの任国にいたころ、この親孝の住んでいた家に盗賊が押し入った。その盗賊を捕らえ縛り付けていたのだが、どうしたことかその盗賊が枷を抜け出して逃げだした。しかし逃げきれないと観念した盗賊は、親孝の五六才のかわいらしい男の子が走ってきたのを人質に取って壺屋の中に引きずり入れた。この子どもを膝の下に押さえつけ、刀を抜いて子ども腹に押し当てる。

そのとき館の中にいた親孝に、家来が走り来て「若君が人質に取られております」と報告をした。親孝はこれを聞き驚き大あわてで行つてみると、実際に盗賊が壺屋の中で、わが子の腹に刀を差し当てている。これを見て親孝は目の前が暗くなり耐え難く感じた。

「ただただ近づいて奪い返そう」と思ったが、盗賊はざらりと光る大きな刀をこれ見よがしに子どもの腹に刺し当て、「近寄るな。もし近寄つたら、突き殺すぞ」と言う。

「言葉通りに本当に突き殺すようなことがあったら、ヤツを百千に切り刻んでも足りない」と考え、郎党ども「よいか、近寄るな。ただ遠巻きにしておれ」と命令して、「館に参つて、殿に奏上しよう」と走つて行った。

ることを申せ。」

盗賊は情けない声で、「どうして子どもを殺そうと思うのでしょうか。ただ命が惜しく、生きたいと思えますので、もしや助かるかと人質にとったのでございます。」

守「よし、それならその刀を投げろ。頼信がこれほど言ったからには、投げずにはすむまい。お前に子どもを突かせて、わしが黙って見ていると思うか。わしのやり方はおのずと噂に聞いていよう。あきらめて刀を投げよ」と言うと、盗賊はしばらく思索して「恐れ多く、仰せに従います。刀を投げさせてもらいます」と言い、遠くに刀を投げ、子どもを起こして解放した。

守は少し後ろに下がって郎党に命令し「あの男をここに引き出してこい」と言うと、郎党はその男の衣の頸をつかんで、前の庭に引きだし坐らせた。親孝はその盗賊を切り捨てようかとも思ったが、守のいわく「こいつは殊勝にも人質を解放した。貧しさの故に盗みを犯し、命を助かろうと人質をとったのだろう。さほど憎むべきものではない。その上、ワシの出頭せよとの命令に従って、出頭をした。もの道理をわきまえたヤツだ。すぐにも放免してやれ。」「何が欲しいのか。言ってみよ」と言うが、盗賊は大泣きして、言葉を発することができない。

守「ヤツに食べ物を少し持たせてやれ。また一度悪事をしたヤツであれば、逃げた先で人がこの男を殺すかも知れぬ。厩

の中にいる草刈りの駄馬の中で強そうな馬に、粗末な鞍を置いて引いて出してこい」と、引つ張ってこさせる。また粗末な弓道具をもってこさせる。これらをもつてくると、守は盗賊にやなぐいを背負わせ、目の前で馬に乗せ、十日分ばかりの食料に干し飯を袋に入れて、布袋に包んで腰に結びつけ「とつと馬を走らせて消え失せろ」。盗賊は守の言うに従って逃げていった。

盗賊も、頼信の一言で人質を解放したのだろう。これを考えるに、この頼信の武人としての威厳は半端ないものである。

例の人質に取られた少年は、その後大峰山で出家をして、ついには阿闍利にまでなった。その名を明秀(みょうしゅう)といったと語り伝えているという。

《コメント》

河内の守・源頼信の言動を通して、武士階級が勃興してくる時期の剛胆な精神を、時代の精神として表現したエピソードと言えそうです。

このエピソードの次には、「馬盗人」を会話なしでも見事な連携によって退治する武士の話が続いており(「芥川だより」第百号)、「今昔」の編者が明らかに武士階級の力強い勃興のある種の共感をもって記録をしているようです。

B級サラリーマン渡世譚(80)

明石 幸次郎

担当者の役割(韓国編 その32)

今回の交渉の鍵は、D工業のトップ陣に根回しを行ってもらおうK商事の金社長との信頼関係を、如何に築くかであると考えた。初対面で、お互い信頼が出来るか否かは、日本人も韓国人も関係なく、直接相手と話をすれば、お互いが大体は感じて、分かるものだ。

それには先ず、相手に対し、偏見を持たずに、個人的な事を先ず話し、その後で、交渉内容の考え方を伝え、その仕事の延長として、お互いが腹を割って何処まで語れるかが大事だと考えた。

幸い?と言ったら何だが、明石にとっては、横に座っているM居は、韓国側と信頼関係を築けなかった反面教師であった。多いに参考にして、この人と逆の事をすればよいと思い、何故、信頼を失ったかを自分なりに整理してみた。

①本人は精一杯、ビジネス上の誠意は尽くし、出来る事はやったが、逆に韓国人特有の「ごり押し」で理不尽な要求をしてきたので、自分の判断で断った。これは、本人は会社の利益を守り、工場の混乱を避ける当然の行為で、自分に何ら落ち度はないと思っている。組織の一員として、ど

だ。それにしても、ワシが行ってみよう。」
と言い、太刀を一振り携え、守は親孝の家へ赴いた。

守は盗賊がこもる壺屋の入り口に立つと、盗賊は「守が来られた」とみて、親孝のときのように息巻くことができず、伏し目になって、刀をいよいよ差し当てて、少しでも近寄ったら今にも貫くような気色だ。その間、子どもの泣くこと甚だしい。

守は盗賊に向かって言う。「お前がその子どもを質に取っているのは、自分の命を助かりたいがためか。また子どもを殺そうと思っているのか。お前の考えてい

こまで相手の為に上司、工場を巻き込んで、社内の調整をして相手のために努力をしたのか？そのプロセスを相手に知らせ、交渉をしたのか？

②客先としての韓国人に対する敬意が感じられず、相手を一段と低い民族、生活文化レベルだと、内心思っているようなところがあった。日本人に対しは、元々、反日教育の影響もあり、良い感情は持っていないので、内心の感情が顔、態度に出れば、高圧的で信用できない日本人と見られ、交渉が長引き、お互いに不信だけが残る。

自分を含めた戦後の世代にも、日本が戦前に植民地化して、それを正当化する為、朝鮮は偏狭な儒教思想に囚われ、その為近代化が遅れた劣った民族であったとする、差別意識と偏見意識が個人の意識として、まだ残っている。

(司馬遼太郎、金達寿、上田正昭、姜在彦などの本で、日本文化、社会の中での朝鮮文化及び在日韓国人などの影響に興味を持つていたので、韓国という国、民族に何ら偏見を持たず、興味をずっと抱いていた)

③M居が言う、自己主張、自分中心で交渉をこり押ししてくるのは、韓国人だけの特有のものではない。韓国人は自己主張が強いと言うのは、個人的な偏見であると考え。日本人もアメリカ人も中国人も交渉では自己主張するし、日本人が感じる程度の差はあるとしても、それは

個人的又は、民族性であり、そこが、又、面白いのではないか。ビジネスの交渉は、自己主張、自己の利益のための、一種の「こり押しゲーム」ではないか。

相手とどう上手く対応しながら、纏めて、最後はお互いが折り合い、相手にも花をもたす。これが出来るかが営業マンの能力で、腕の見せどころではないか。

相手の理不尽で、こり押しとも言える要求であっても、それを無視するのでは、到底、信頼は得られない。理不尽な要求をしてくる相手の事情に聞く耳をもつて、どう受け止めて理解するか。その要求をどこまで満足させられるかを悩み考えて、落とし処を見つけ、纏め上げるのが輸出営業担当者としての、仕事ではないか。

④韓国側と、公私の友人を持って、何かあった時に味方になってくれる関係を作れるか？その為には、歴史、民族性、酒と料理を含めた文化などを理解出来る勉強が出来るか？酒を酌み交わす、機会をどれだけもてるか。

思いついたことを、大学ノートに書きながら、頭の中を整理した。

その後、高島屋まで、土産を買いに行くのも時間が掛かるので、会社に入りにして注文を取っている外商部のK浜の顔を思い出した。直ぐに、庶務課に電話して、社内放送で呼び出してもらった。

K浜は直ぐに4階の輸出部のフォアアールに来て、ニコニコ愛想笑いをしながら「輸出部の明石さんの名前は初めて聞いたので、どんな人かと思つたら、以前

資材部におられた明石さんですやんか？久しぶりですね。こちらに転勤で来られたんですね？」「そうや、堺工場は二年足らずで首になつて、一週間前に代わつてきたんや。またK浜さんは、挨拶しなかつたが、明日、韓国に出張することになつて、土産を持っていかなアカンので、何かエエもんじゃないか？」

「予算はどの位ですか？」「千円で10個、それから、日持ちする、クッキー三千円位のを2個頼むわ！夕方まで、持つてきてくれる？」

「分かりましたが、その千円の土産は何がエエですか？」「何かエエものないか？軽くて、K浜さんのセンスに任すわ？」K浜は困つた顔をして「ハンカチはどうですか？センスがよく、千円以内でエエのを、売り場の女性に見つくるって貰いましょか？」「俺もそれを考えていたんやが、プロに聞いた方がエエと思つたので、来てもらった。良かったわ。5時まで頼むわ。クッキーも任すので、宜しくお願い致しますわ」「分かりました！それにしても、大変ですね。転動したばかりで、海外出張ですか？」「海外と言つても、飛行機で2時間や。うたた寝してたら、着く距離やんか」「まあ、そうですがー。分かりました。有難うございます。領収書はG本さんに又、渡しておきます」と元高校野球甲子園組、福井商業の元エースは、周りの女子に愛想を振りまきながら出て行つた。

これで、準備は出来たと思つたら、11時近くになつたので、昼飯を何処で食べようかと考えていたら、「おおい！明石、昼飯、お前の好きな、あのけつたいな洋食屋へ行こうか？お前、出張の支度金が出たやろ、G本さんとY谷さんにおごらなアカンで！なあ、N川、お前もあみだ籤で負けてばかりやから、今日は奢つて貰え！」と斜め前の赤シャツのK村が大きな声で話し掛けてきた。明石は「いいですよ！行きましょか？なあ、N川君もどうや！先輩が言つてるよ」と話しかけると「いいですか？明石さん！」「君さえ良ければ、勿論エエよ」と言うことで、今日は4人、夫々が12時15分前に時差で玄関で落ち合うと言うことで出て行つた。

オクラの山たより(42)

困了生

一

尼寺や 十夜に届く 鬢葛(びんかざら)

毛馬村を出て以後、蕪村がどういった経緯を経て浄土宗の僧となり江戸へやつて来たかはよく分かりません。毛馬村を出てから母親の故郷の与謝へ行き丹後の寺で僧になつたという話もありますが、想像の域を出ません。多くの研究者が見るところ二十歳前の蕪村は江戸にいました。

右の句は一七三八(元文三)年に刊行さ

れた露月が編纂した「卯月庭訓」に載せられた二十三歳の蕪村が確実に書いたとされる最初の一句です。ただし、俳号はまだ蕪村ではなく幸鳥でした。前年（一七三七）の六月には日本橋石町の夜半亭巴人（宋阿）に入門して、内弟子として師の住居に同居していました。わずか一年で俳誌にデビューしたわけです。蕪村あつれば、さすがです。

この句には詞書があり「鎌倉詠物（かまくらあつらえもの）」とあります。鎌倉の尼寺といえは駆け込み寺で有名な「東慶寺」。「十夜」とは十夜念仏のことで冬の浄土宗の行事でした。「鬢葛」は整髪料に使う「さねかずら」のことです。句意は「どうしても離れたい夫からようやく東慶寺に逃げ込むことができて十夜念仏のお勤めをする女性。その人のもとへ、前から頼んでいた『さねかずら』が届けられた。それはこれから髪を美しく整えていとしく思う男性に逢うための品物である」という色っぽいもの。

この句は百人一首にある

名にし負はば 逢坂山の さねかずら

人に知られで くるよしもがな

という藤原定方の歌をふまえて詠まれています。「鬢葛||さねかずら」は恋する人に逢いたいという思いをこめて詠まれた語です。嫌な夫との離縁を望んで駆け込んだ東慶寺で二年と一日以上のお勤めを

すれば過去の縁が切れて正式に離縁ができました。そうすると、この女性は間もなく年季が明けて、晴れて俗世にもどった時、いとしく思う男性と愛し合うことを思い描いて、届いた鬢葛を何度も手にとって眺めたことでしょうか。早くこの寺から出る日が来ないかしら、愛する彼と会える日が。と思いつつ。

ここまで見てくると、この女性が寺に駆け込んだ理由が見えてきそうです。たった十七文字の句ですが、この句からさまざまな物語が展開できそうです。

それにしても、この句を蕪村が作ったころの將軍吉宗のお膝である江戸はどういった状態だったでしょうか。

大岡越前守忠相が南町奉行から寺社奉行に転じたのは一七二六（元文五年）のこと。二十年近く南町奉行の職を勤め上げた大岡忠相にはさまざまな逸話が残されており、それが物語化されて「大岡裁き」として有名です。蕪村が江戸にやって来たのが十八、九歳のこととすれば、大岡忠相が南町奉行を勤めていた時代のこと、江戸市中のどこかで蕪村は大岡忠相の姿を見たかもしれません。

よく知られているように江戸の町奉行は江戸の街の治安・防災・行政をすべて掌っており真面目に勤めるとかなりの激務を要求される役職でした。大岡忠相はこの職にあること十九年。もう一人の名奉行であった天保の時代の北町奉行「遠山

の金さん」こと遠山金四郎景元が十年前後の在職期間であったことを見てもこれはかなり長い在職期間であったといえるでしょう。この十九年間の間に大岡忠相が行った優れた業績は多いのですが、彼を悩ましたのが江戸の都市問題でした。

都市への人口流入が進み集住性・雑居性が高まると、どの都市でも下層の社会が拡大します。それにもなつて都市固有の問題も発生します。

この時代、居所を移動するには身元保証となる「宗首手形」が必要でした。勝手に流浪して江戸へとなだれこんできた貧しい人たちはもちろんそうした手形を持つてはいけません。ですから正式には町屋には居住できません。調べてみれば不法移民であり、彼らは無宿人といわれました。無宿人の多くは都市周辺の場末に滞留していきましました。

すでに江戸の町には武士を除いて町方（町人に属する居住者）の人口はおよそ五十万人でした。その内訳は家屋敷を所有する家持層が十五パーセント、借家に住む借家人が七十パーセント、商家に住み込む奉公人が十五パーセントほどであったといわれています。人口の性比は男性が女性の一・七倍であったのですが、幕末では一・〇二倍となつていきます。これは借家人で家族を営むものが増えて不安定ながら定住者が増えたためでしょう。

この町に不法移民である無宿人が次々とやってきて、ある者は借家に住みつき、

ある者は無宿人たちが勝手に江戸の町の周辺につくった「新町（新しく町場化した場所）」に住みつきました。こうした無宿人の多くは年貢増徴の苦しみには耐えきれず生まれた地を捨ててきた人々でしたが、諸国で所払いの追放刑になつた犯罪者も含まれていました。享保の改革による年貢増徴政策により年々増加していくこうした江戸の無宿人が犯罪の温床となつていったことは容易に想像がつくことです。事実、享保八年から享保十年の二年間に「火賊（放火犯）」として処罰された者は一〇二名。そのほとんどは江戸以外の地から流れ込んできた無宿人でした。大岡忠相はこうした「新町」の町屋の取り払いを何度も命じています。しかし、そうした命令も増え続ける無宿人対策には有効な手立てとはいえませんでした。

その原因には大名屋敷の武家奉公人に諸藩の財政難から日雇いの仕事に雇用されることも多くなつたということや商家の奉公人にこうした無宿人が雇用されることも多くなつたということもありました。今風にいえば非正規雇用パートの仕事であれば無宿人といえども何らかの仕事にありつける可能性があつたのです。享保の時代、江戸の町は慢性的な人手不足になつていたのでした。

「人宿」という奉公人の紹介業もありました。当時の記録を見ると給料を受け取るやいなや欠落（どこかへと消える）者が多くあつたために幕府は「人宿」の同業

者組合に監督の徹底を指示しましたが、大した成果はなかったようです。

また、無宿人から武家奉公人となった者が外部の犯罪者集団とつながっていたために武家屋敷が賭場となることも多くあり、大岡忠相は何度も武家屋敷での博奕取り締まりを強化したほどでした。無宿人の増加は江戸の人々の頭痛の種となっていたのです。

そして、都市の下層に滞留するこうした無宿人たちが中心になって江戸で初めての打ちこわし事件を起こします。

蕪村が毛馬村から出奔したころ、一七三三(享保一八)年のことです。「米価安」は年貢米の売買に依存していた領主層にとっては死活問題であり、幕府は米価が安くなることを防ぐためにさまざまな施策を講じていました。享保十六年には「買米令」を江戸で出し幕府が御用米を買い上げることで江戸の米価を上昇させようとした。現代の政府が日本銀行を通じて為替相場や株価を操作しているのと同じことをしていたわけです。

さらに幕府は高間伝兵衛ら八人の米問屋に米の流通量を制限させ、安売りを禁じて米問屋仲間が定めた価格(たぶん幕府が命じた価格)で米を売るように命じています。かなり露骨な米価上昇政策ですが、そこへ享保十七年の飢饉です。飢饉のため幕府は昨年買入れた米を救援のため西日本に送ったこともあって、上昇気味であった米価は米不足のためにさら

に急上昇し、庶民の生活は逼迫します。高間伝兵衛と大岡忠相をかけた

米高間 一升二合で 粥にたき

大岡食はぬ たった越前

(米が高くて銭百文でいつもなら二升五合も買えるのに今は一升二合しか買えない。それでお粥にしたが多く食べられず、食べられたのはたった一膳だけだった。)

という狂歌が今に残されています。「私利私欲のために米問屋が米を買い占めて値段をつり上げている」と考えた江戸の下層社会の人々二千人ほどが高間伝兵衛の店に押しかけ打ちこわしを行いました。これが江戸での初めての打ちこわしとなりました。

ここで急いで言葉を加えなければならぬのは、米価値上げの政策は將軍吉宗が熱心に取り組んだもので大岡忠相はこの方針には消極的であったということ。忠相は江戸町奉行という役職から気の毒にも「江戸庶民の敵」という役回りを引き受けさせられたわけです。米価値上げに將軍吉宗が固執したのは米価安に対して諸物価がドンドン値上がりして「石高制」という米が社会の富の量を表現するという当時の社会システムを根本から揺るがしかねないからでした。要は米価と諸物価のバランスが一定であれば問題ないわけです。吉宗は物価の値上げに追いつかせるべく米価高とすることで何とかしようとしたが、江戸の下層民から手痛いしっぺ返しを受けました。その

一方で忠相が考えていたのは、もう一つの方法。物価の安定政策でした。

忠相は物価上昇を抑えるため物流の適正化をめざして問屋・仲買・小売の三段階で「仲間」を作らせて価格の相互監視をさせることをしています。また大坂と浦賀に関所を設けて商品の動きをしっかりと監視させました。こうした流通機構の合理的な管理システムにより物価上昇は歯止めがかかるようになりました。取りあえずですが諸物価高騰抑制の成功です。

しかし、それだけでは物価問題は完全解決とはいえません。次に忠相が取り組んだのは通貨の問題です。

忠相のアイデアは江戸の物価が高いのは供給よりも需要の方が大きいからであるとすれば大坂から来る商品を増やせばよいではないか、というもの。江戸時代、江戸では金が流通し上方では銀が流通していました。とすれば、円安である日本の商品をドル高のアメリカで売れば商品が多く売れて輸出関連企業の儲けが大きくなると同様に、金を高くして銀を安くすれば、江戸へより多くの商品を回す方が大坂の商人にはより大きな儲けが出ます。そして、江戸市中に多くの商品が出回れば必ず物価は下がる、と大岡忠相は考えたのです。そこで彼が行ったのが貨幣の改鑄です。

一七三六(元文五)年、忠相は実際にそれを行いました。単に金や銀の含有率を下げただけではなく一番の特徴は金の品

位と銀の品位とに差を付けて作ったことです。それにより金一両が銀五十匁であったのが、金一両が銀六十匁となりました。これにより忠相のねらい通り江戸の物価問題は落ち着いていったのです。大岡忠相が現代と同じ考え方で経済政策をしているのが驚きです。

さて、蕪村が江戸へやって来たのは大岡忠相が約二十年に及ぶ江戸町奉行としての奮闘の最後の年であると考えられています。彼の目には忠相を悩ました江戸の都市問題はどうか映ったのでしょうか。それは分かりませんが、たぶん、何者でもなかった蕪村は何者かになろうとして、おそらくは俳人または画家のプロとして生きていける力をつけるための東上です。から江戸の様子を細かく見る余裕などはなかったことでしょう。もちろん、蕪村は無宿人として江戸に來たわけではありません。浄土宗の僧となっていた彼の手には知恩院系のいずれかの寺院の「宗旨手形」がしっかりと握られていたはず。二

いつごろから蕪村が俳諧の道に入りこんでいったかは、よくわかりません。蕪村が四十歳前後に描いた「三俳僧図」には丹後宮津の三人の俳諧好きの僧侶が描かれていて贊の文章も書かれています。これを見ると母の故郷である丹後でもさかん

に句会が開かれていたようですから、かなり早い時期から俳諧の世界に触れていたことは確かです。それにしても驚くのは俳諧の地方への普及ぶりです。これには芭蕉の弟子である各務支考の起こした美濃派（驚くべきことに支考以来のこの流れは三百年後の現代も続いています）などの地方での普及活動によってなされました。このあたりの事情をみていきましょう。

偉大なるリーダーであった芭蕉の死後、蕉門の人々は大きく二つのグループに分かれます。江戸と地方です。

江戸のグループの中心は其角と嵐雪。中でも其角は享楽的で技巧的な、いわゆる洒落風を好み江戸座一派の祖となりました。作風は閑寂の風とは異なり伊達を好み知的な作為をこらして都会的な洒脱で華やかなものでした。以前、紹介した難解な

饅頭で 人を訊ねよ 山ざくら

の句もそうした作風の例ですが、同じく難解な句に次のような作品もあります。

背面の達磨

武帝には 留守と答へよ 秋の風

達磨は面壁九年の禅定をなした禅宗開祖の僧。武帝と仏教の熱心な信者だった梁

の武帝（五〇二〜五四九）のこと。句の内容は達磨の教えを求めて武帝がやってきても禅定の邪魔であるから居留守を使つて追っ払つてくれと従者に達磨がいつている場面の趣向です。梁の武帝が「仏教の根本義は何か」と訊ねられた達磨は「廓然無聖（雲一つない青空のように『聖』なんぞというものないわい。）」と答え、むつとした武帝が「では、自分の前にいるお前は何者だ」と聞くと達磨は「不識（どこの誰か、わしやそんなことは知らん）」と答えて梁の地から去つて行つたというのは仏教書『碧巖録』にある有名な話。細かい講釈は『碧巖録』を見て下さい。この其角の句はこうした背景にある故事を知っていないとよく分からず、わかれば「なるほど」と膝を打つて大笑いという作品です。こうした傾向は江戸の都会人には大受けでしたが、その流れは享保の頃の江戸の俳諧にも受け継がれていきます。たとえば、其角の流れをくんで一七二六（享保十一年）年に没した江戸俳壇のボスともいえる水間沾徳の代表作に

低きかたへ 水のあはつや 初嵐

という句があります。この句には作者自ら註を付けて

「水の満つる時は泡立ちて先低き方へ走る物なり。粟津は最も低き処なり」と

いつています。つまり句意は「水は泡だつて低い方へと流れる。その泡を名にし

た粟津は琵琶湖の湖岸で最も低い所だが、そこへ水ではなくて秋の風が先ず訪れた」ということでしょう。作者はこうした手のこんだ技巧をこらし、わざわざその種明かしまでしているのですが、結局は句が持つ謎の種明かしへの興味が一句の眼目となつていて、とてもここに紹介するほどの句とはいえないものです。俳諧を古典作品と並ぶような芸術まで高めた芭蕉の俳諧精神はどこへ行つたのか、といいたくなるほどです。

こうなつていった原因には其角と嵐雪ともに「業俳」と呼ばれた俳諧を自分の職業とした人々であったということがあげられます。同じ芭蕉の弟子といつても江戸の魚を商う幕府御用の商人であった杉山杉風や彦根藩士であった森川許六たちは俳諧を余技とする「遊俳」とは異なり

ます。職業として俳諧師として生活していくためには大衆の好みに合わせることも大事なことであつたのです。すでに蕉門のかかりの人々が当時江戸市中で盛んだつた点取俳諧（作品を評価する点者が集つた人々の俳句作品に点を付け、互いに点数を競い合うこと）に関わつていました。点取俳諧といつても当時はやつていたのは前句付点取です。これはあらかじめ出された前句（七・七）に七・五・七の句を付けその点数を競い合うというもの。芭蕉は前句付点取に弟子が関わっていることに眉をひそめ

「江戸での俳諧の様子は 点取りはやり候。もつとも点者どものためには悦びにてござあるべく候へども、さてさて浅ましく成り下がり候。なかなか新しきなど、おもひもよらず、……句作りに一円に聞かれぬことにてござ候。」

元禄五年五月七日付の去来への書状より

常に芸術の高みをめざしていた晩年の芭蕉の苦々しい表情が見えるようです。業俳として日々の生活を送っている俳人たちにとつては芭蕉の言葉には目をつむるほかなかつたでしょう。

なお、芭蕉の死後にはいつそう前句付点取は盛んとなり川柳という新しい文芸のジャンルを生み出しましたが、他方では「三笠付け」（出された冠句の五に対して七・五を付け点数を競い合う）となり、さらにはどのような点数が付けられるかお金を賭ける博奕として遊ぶようになりました。こうした博奕となつた「三笠付け」は当然ことですが、奉行所からしばしば取り締まりの対象となり主催者（頭取、金元、宿元といわれた）の多くは八丈島などへ島流しとなつたことが記録に残っています。

こうしたことは地方の大衆に蕉風の俳諧を広めようとした各務支考や竹田野坡にも同じ事情がありました。広く大衆に俳諧を普及するためには大衆にも近づきやすいものとせねばなりません。奇抜な趣向や誇張した表現、それに大胆な擬人

法を使う江戸の俳風は地方俳人の間でも喜ばれましたが、やはり「平易な句作り」の方向にも発展していきました。

よく知られているように晩年の芭蕉は「軽み」という理念を唱えました。「軽み」は「高く悟りて俗にかえれ」という言葉があるように深く思考して分かりやすい言葉で表現せよ、ということであると筆者は理解しています。作家で脚本家の井上ひさしがどこかでいつていた

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかしく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに……」

と似ているといえれば俳句の専門家に大目玉を食らいそうですが、やっぱり似通っているな、と筆者はつい思ってしまいました。

それはともかく話をもとせば地方で蕉風の俳諧を広めていく過程でこの分かりやすい俳諧ということが重視されたことは否定できません。そのため地方の俳諧グループの一つである美濃派の作風に対して「卑俗」にして「平明」に過ぎるという批判が起きました。たとえば、各務支考の次の句です。

今一俵 炭を買おうか はるのゆき
涼しさや 縁より足を ぶら下げる

船頭の 耳の遠さよ 桃の花

いずれの句も分かりやすい句で素直に自分の思いや景色を詠んでいます。口語的な表現もあつて初めて俳諧に触れる人でも「二度やってみようか」という気分が生まれそうです。こうした作風をさらに推し進めた人に美濃国は関の人、広瀬惟然がいます。その風狂ぶりが伴蒿蹊の「近世畸人伝」にも書かれた人です。惟然の句をいくつか紹介します。

のらくらとただのらくらとやれよ春

梅の花 赤いは赤いは あかいわさ

水鳥や むかふの岸へ つういつい

ここまでくると「珍なる俳句」とはいえても成功した俳句といえるかどうか、きわどいところです。当然ながら同時代の俳人から「戯言俗言、飾りなく巧みなく……思慮を煩わさ」ない人物だといわれています。

以上、述べてきたように江戸の市民に受けることをねらった江戸のグループにしろ次第に平易かつ卑俗な句作りとなつていった地方のグループにしろ、俳諧を全国に広め大衆化していった功績は大きいものの、やはり芭蕉のめざした俳諧の世界からずいぶん隔たつてしまいました。そのため蕪村が江戸に出たころには

「俳諧はこのままでいいのか、芭蕉に帰るべきではないのか」という思いが俳人たちの心にきざし始めた頃であつたのです。

三

江戸へ出た蕪村はあちこちの俳人の所を出入りしたらしいのですが、一七三七（元文二年）には夜半亭巴人の住居（つまり夜半亭）に住み込むこととなります。ちょうどこの年の四月に巴人は十年に及ぶ京都暮しを切り上げて戻ってきており、六月に日本橋本石町にある「時の鐘」の近くに居を定めました。時鐘の音がよく聞こえることから「夜半の鐘声客船に至る」（唐の詩人張継「楓橋夜泊」にちなんで夜半亭と名づけたのです。

夜半亭巴人は早野氏、通称甚助で一六七六（延宝五年）に下野国那須郡に生まれました。若くから俳諧を学び江戸に出て其角や嵐雪に師事しています。一七〇七（宝永四年）年に其角、嵐雪を相次いで失ったのですが、俗調に流れつつある周囲の俳人とは異なり落ち着いた静観的な態度をもつて句作りを続けました。しかし、一七二八（享保十二年）、最も信頼していた友とも死別し、京へと居を移しました。それから十年間、巴人の交友範囲は京都俳壇の全般におよび至り彼の地位も重んぜられるものとなっていました。しかし、名利に頓着しない彼は京にあること十年で一七三七（元文二年）四月、再び江戸に帰

ってきます。この帰東の動機を作つたのは巴人の古い友人である結城の砂岡我尚の子で巴人の弟子でもあつた雁宕（がんとう）であるといわれています。巴人が京の人々に惜しまれて旅立ち、江戸日本橋本石町の夜半亭に居を定めたのは六月のこと。その折りに次の句を詠んでいます。

我が宿と 思へば涼し 夕月夜

巴人が宰鳥（後の蕪村）を弟子としたのも夜半亭に住みだしてすぐのことだつたと思われまふ。そして翌元文三年正月には巴人一門の歳旦帖を出しています。そこには「宰町（宰鳥のことと推察される）」の名で次の句が載せられています。

君が代や 一三度したる とし忘れ

蛇足ながら巴人が宋阿という俳号を用いるのはこの元文三年の歳旦帖からです。宋阿こと巴人が蕪村をその門に迎えたことは偶然のことかもしれませんが、そこには何らかの因縁が感じられます。それは俗臭の多い、しかも俳諧が賭け事材料とまでなっている江戸の俳壇にあつて巴人が孤高ともいえるほどに高潔な風雅を保つていたからでしょう。そして何よりも蕪村の友人で巴人の弟子である雁宕が介在していたことは間違いないことです。一七四一（寛保元）年正月に出された「夜半亭歳旦帖」に二人は次の句を並べ

て載せています。親しい二人の息は合っ
ていませんか。また、幸鳥が付けた「頭巾
きて」とはうぐいすが頭に雪をかぶった
姿だと筆者は思うのですが、いかがでし
ようか。なお、「年内立春」とは陰暦で新
年になる前に立春が来ることです。

年内立春

木くらげの縁より雪は解けにけり

雁宕

頭巾きて鳴く明けのうぐいす

幸鳥

つくば山本に春を待つ

行く年や芥流るるさくら川

幸鳥

歳旦帖の末尾は六十五歳となっていた巴
人の次の句です。

年の内を 春を春をと ぬけ参る

翌寛保二年二月より体に不調を来たし、
六月六日に亡くなりました。辞世の句は

こしらへて 有とは知らず 西の奥

蕪村が師である巴人の死を悼んで詠んだ
句は

我がなみだ 古くはあれど 泉かな

でした。この句には次の文が添えられて
います。

宋阿(巴人のこと)の翁(このとし)に
る予が孤独なるを拾ひ助けて、枯乳の

慈恵ふかりけるも、さるべき宿世に
や、今や帰らぬ別れとなりぬる事の悲
しびのやるかたなく、胸うちふたがり
て、云ふべき事もおぼえぬ。

宋阿一周忌追善集「西の奥」寛保三年刊

「このとしごろ」は「この何年間か」、「枯
乳の慈恵」は「年老いてなお温かい慈愛の
心」の意味だと思われませんが、「枯乳」の
語は用例が見つからず意味不明です。お
そらく蕪村の造語だと考えられます。夜
半亭での巴人との生活は五年ほどの期間
でした。母は亡くなり一家は離散した孤
独な心を宿した蕪村を拾い上げ深い慈愛
をもつて接した六十代の巴人の人柄もう
かがわれそうな文です。

最後に筆者の気に入っている巴人の作
品をいくつか紹介します。

飯蛤(いいだこ)や

薄紫の 一しぼり

日の影の 石にこぼるる

瓢(ひさび)かな

送り火や 今宵定むる 嫁もあり

伊勢近し 尾花が上の 鱗雲

小夜時雨 舟へ鼠の わたる音

どれも落ち着いた静けさで物を眺めてい
る句です。世俗から遠く離れた気品の高
さがただよってくるようです。これはた
ぶん巴人の人柄から発するものなのでし
ょう。

筆者の好みは「伊勢近し」の句で、伊勢

の地を象徴する風と海のイメージを風
になびく尾花(薄)の草原と空に浮かぶ鱗雲
によって美しく表現しているのは見事で
す。

隠された歴史(17)

満田正賢

前回は、「神功応神伝説は継体・欽明期
に成立した。宣化の子孫が筑紫に移って
磐井の乱によって滅んだ九州王朝を乗っ
取った時、自らを『筑紫で生まれた応神天
皇の子孫である』と紹介して筑紫の人々
の受け入れを求めた。」という仮説をご紹
介しました。今回は、引き続き「応神天皇
を神格とする八幡信仰の発祥地である宇
佐八幡宮の成立に焦点を当てて考察して
みたいと思います。

まず、文献上の八幡神の登場について
ですが、古事記、日本書紀には八幡神の記
載は一切ありません。但し理由はよくわ
かりませんが、宇佐八幡宮縁起には「日本
書紀云欽明天皇三十二年辛卯八幡大明神
頭於筑紫矣義同前云々」という存在しな
い記事が載っています。そして続日本紀
に八幡社が突然登場します。

「聖武天皇天平九年(七三七)四月己巳、
遣使伊勢神宮、大神社、筑紫住吉、八幡二
社、及香椎宮、奉幣以告新羅礼无之状。」
これは「新羅の使者の無礼を各神に報告

して、どのように対処すれば良いか伺い
を立てた。」という記事です。天平九年時
点では管崎宮はまだ創建されておらず、
「筑紫の八幡社」とは宇佐八幡宮のこと
です。「筑紫住吉、八幡二社」には「住吉
社と八幡社の二社」という解釈と「八幡宮
の二社(八幡大神、比咩大神)」という二
つの解釈があります。なお、管崎宮は社伝
では延長元年(九二二)に大分八幡宮より
遷座されての創建と伝わっています。大
分八幡宮(だいぶんはちまんぐう)は、福岡
県飯塚市にある神社で管崎宮の元宮とし
て知られています。福岡県の豊前地域に
応神天皇と結びつく前の初期の八幡神信
仰が発生していたことについては後述し
ます。

応神天皇の化身たる八幡神の顕現時期
についてはいくつかの書物に記されてい
ます。

まず、宇佐宮の縁起としては最古の「宇
佐八幡宮弥勒寺建立縁起(建立縁起・承和
縁起とも略される)」の概要をご説明しま
す。まず、建立縁起には大神(おおが)氏
系伝承と辛嶋氏系伝承の二種類が収めら
れています。辛嶋氏系伝承の冒頭に「大神
は初め天国排開広延天皇(欽明天皇)の御
世に宇佐郡辛国宇豆高島に天降坐」とあ
ります。村田真一氏は「宇佐八幡神話言説
の研究」(法蔵館)において、「宇佐八幡宮
弥勒寺建立縁起(建立縁起)」は宇佐宮の
『縁起』としては最古のものであると同
時に辛嶋氏の祭祀者としての価値を解い

ており、大神氏の神話的事績を強調する『託宣集』とは対照的である。承和十一年(八四四)成立とされるが、寛平元年(八八九)から寛弘六年(一〇〇六)の間の寛弘六年に近いある時期に辛嶋氏によって自氏の祀官としての重要性を主張するものとして作成されたのではないか。」と考察しています。

大神氏系伝承の特徴は、①八幡大神を「品太天皇」つまり応神天皇の御霊としていること②その顕現の時期が欽明天皇朝であること③顕現の場所が豊前国宇佐郡御許山(おもとさん)馬城峯(まきのみね)として、④これを大神比義が戊子年に鷹居社を建てて祀り、自ら祝となつて、⑤鷹居社から小椋山の社殿に遷座していること。です。

一方、辛嶋氏系伝承の特徴は

①内容が詳細であり、かつ具体的である。②大御神が欽明天皇朝に宇佐郡辛国宇豆高島に天降りその後大和国吹嶺↓紀伊国名草海島↓豊前国宇佐郡馬城嶺、という神幸を伴っていること③馬城嶺に顕現後、比志方荒潮辺↓現泉社の地↓現瀬社の地↓現鷹居社、と再び神幸していること④二度目の神幸の間、大御神の祝や禰宜としたのは、辛嶋勝乙目(からしまのすぐりおとめ)、同意布売、同波豆半、といった辛嶋氏の巫女であること。ここには大神氏は登場しない。⑤現泉社の地において「豊前国特坐神」である崇志津比咩神が大御神に酒を奉っていること

と⑥大御神が鷹居社に坐すとき、その御心荒々しく「五人行三人殺一人生給」と恐ろしい記載がみられること。です。

次に扶桑略記に載っている八幡神顕現記事の原文をご紹介します。扶桑略記は平安時代の私撰歴史書です。

「欽明卅二年。．．．八幡大神顕於筑紫矣。豊前国宇佐郡厩嶺菱瀉池之間。有鍛冶翁。甚寺異也。因之大神。比義絶穀。三年籠居。即捧御幣祈言。若汝神者。我前可顕。即現三歳少兒『云。』

以○(○は芸の下に木)託宣云。我是日本人皇第十六代菅田天皇廣幡八幡曆也。我名曰護国靈験威身神大自在王。并国々所々垂跡於神明。初顕坐耳。一云。八幡大○(○は草冠に卩)初顕豊前国宇佐郡馬城岑。其後移於菱形少倉山。今宇佐宮他。已上出彼縁起文」。

扶桑略記は一連の記述の最後に「已上出彼縁起文」とあり、縁起文からの引用だとしています。

次に八幡愚童訓に載っている八幡神顕現記事の原文をご紹介します。八幡愚童訓は鎌倉時代に成立したもので、元寇も記述しています。神功皇后が住吉神を大將に高良神を副將にして八百万神を従えて三韓征伐をしたことや、蘇我物部戦争、乙巳の乱、壬申の乱、元寇などあらゆる戦争時に八幡神が現れて記紀で正統とされている天皇方を応援したことなどが描かれていて、大変興味のある読み物です。「第卅代欽明天皇十二年正月二至。大神

比義断精進シテ捧御幣祈申セシ時。二歳小兒ト顕レ立竹葉ノ上ニ玉フ。我日本人王十六代菅田天皇也。護国靈験威力神通大自在王菩薩也告給。百王鎮護三韓降伏。神明第二宗廟ト祝ハレ給者也。豊前国宇佐郡馬峯石体ハ最初垂跡ノ所也。天平勝宝元年(七四九)造宮宇佐宮。卅三年必造替シ奉ル。九州平均課役也」

次に、建武二年(一三三五)に宇佐重栄が記した宇佐八幡宮縁起の原文をご紹介します。

「第三十代欽明天皇御宇廿九年戊子。筑紫豊前国宇佐郡菱形池之畔小倉山之邊。有鍛冶之翁。带奇異之瑞。為一身現八頭人聞之為實見。．．．同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯。捧幣傾首申若於為神者。可顕我前此語未説。現三歳少兒於竹葉上。而宣辛國乃城爾始天天降八流之幡。吾者日本神土成禮利。一切衆生左毛右毛任心多利。釋迦菩薩之化身一切衆生濟度牟土念天神道土現留也我者是禮日本人皇第十六代菅田天皇廣幡八幡麻呂也。．．．」

以上各書物に記されている八幡神の顕現記事をご紹介しますが、各書物の記述に共通しているのは、八幡神が応神天皇として顕現するのは欽明期であるという事です。

次に、達日出典(つじひでのり)氏の考察をご紹介します。(達日出典著「八幡神と神仏習合」講談社現代新書。「最初「比売大神」を祀っていた宇佐氏は

六世紀半ばまでに急速に衰退し、宇佐平野から姿を消したようである。宇佐台地上にある川部、高森古墳群は宇佐国造一族の墓域であり、六基の前方後円墳はその首長墓とみられている。しかし六世紀中頃の築造とされる鶴見古墳を最後に姿を消す。宇佐国造は磐井に荷担して破れ衰退したと考えられる。」

「宇佐氏が去ったあと大神氏と辛嶋氏が宇佐の地に入ってきた。八幡神は辛嶋氏が伝える新羅神であった。『八幡宇佐宮御宣集』に「辛国の城に始めて八流の幡と天降りて我は日本の神と成れり」という記述がある。」

「大神氏は大和三輪山を祀る名族で、新羅国神であった八幡神を応神の化身たる日本の神に変え、国家神道としての八幡信仰を確立した。」

次に宇佐八幡宮に伝わる隼人平定(田中恒清「日本の神様八幡大神」戎光祥出版)の伝承について田中恒清氏(石清水八幡宮宮司)が説明している内容をご紹介します。(田中恒清「日本の神様八幡大神」戎光祥出版)。

「元正天皇養老三年(七一九)大隅日向の隼人の反乱に際し、八幡大神は鎮定の為に南九州に出御した。その後「隼人の霊を慰むべし」との神託を告げ、天平十六年(七四四)に宇佐の和間浜で放生会が営まれた。」

「養老四年(七二〇)南九州による大規模な反乱が発生。八幡神の『御験』を裁き、

宇佐宮の禰宜が先導する『八幡神軍』がめざましい活躍をみせ、抵抗する隼人を平定せしめた。」

「抵抗する隼人の首百体を宇佐に持ち帰り、その御霊を祀った。その証として、百体神社、凶首塚（これは実際には六世紀末の横穴式石室）がある。」

次に、宇佐八幡宮の成立に関する岡村孝子氏（有名な歌手と同名ですが別人です）の説をご紹介します。岡村氏は「古代神祇信仰と仏教―宇佐八幡宮の成立―（思文閣出版）の中で宇佐八幡宮の成立の概要を実に簡潔にまとめると共に的確な問題意識を提示しています。まず岡村氏がまとめた宇佐八幡宮成立の概要です。

「八幡信仰の発祥地は、現在大分県宇佐市にある御許山（おもとさん）の山麓馬城嶺（まきのみね）に鎮座した八幡宮である。天武皇統による統一事業が山場を迎えた神亀二年、聖武天皇の即位と同じ時期に馬城嶺が切り開かれ、鎮め祭られた。従来の氏神をまつる神社とは性格を異にし、在来の農耕的性格を持つ宇佐氏と精錬技術を持つ渡来系の辛嶋氏と大和と繋がりをもつ大神氏の信仰が大和朝廷による統一事業である。隼人を帰属させるための戦いに参戦する中で融合し、

八幡神宮として馬城嶺に鎮め祭られた。それは、その後の八幡神宮の

神職や神宮寺である弥勒寺の僧や検校の職が、大神、宇佐、辛嶋の三氏によって成されていることから

も明らかである。八幡信仰の特質の一つは、かなり早い段階で仏教と習合していることである。神亀二年

日足に弥勒院が建立されるが、天平十年には八幡神宮の境内に神宮寺である弥勒寺として移される。養

老年間の隼人との戦いの折りから隼人の御霊を鎮めるために仏教儀礼にもとづく放生会を行っている。また『続日本紀』には、朝廷より八幡神宮に秘錦冠一頭と金字最勝王

教と金字法華経各一部、度者各十人が奉られる記事があり、仏教との関係が窺われる。

また天応年間に『護国靈験威力神通大菩薩』の神号を朝廷から奉られ、僧形の神像も造像される。

また他に特質すべきことは、八幡神宮は聖武朝になつての創祀であり新しい神と言えるが、従来の神社が氏神的性格を有していたのに対して、八幡神宮は「護国」の神としての性格を持つことである。東大寺

大仏造立に際しては、その成功を託宣して入京し、東大寺の鎮守社として迎えられている。天応年間と延暦

年間と与えられた神号にも『護国靈験威力神通大菩薩』『護国靈験威力

神通大自在菩薩』と護国の神威が認められる。また元正天皇の頃より政変等国家安泰の祈願がなされるが、『日本三代実録』には対外的な兵疫の災いの際に奉幣され祈願されている記事が多い。……」

岡村氏はこのように概要をまとめたあと、独自の問題意識を提示します。

「私見では、ただ単に北九州地方における有力氏族の信仰が融合して鎮座したと見るだけでは不十分と思われる。……早くから仏教と習合し行われる放生会から、隼人との関係は否定できない。しかし、なぜ八幡大神の神格が応神天皇なのであり、神功皇后をまつる香椎宮がなぜ

神亀元年、聖武朝になつて香椎廟になつたかを論ずることなしに宇佐八幡宮の意義は語れないと思われる。それは皇統の問題と深く係わっているからである。」

そして岡村氏は、自身の問題意識を追究する為、継体紀の「日本の天皇及び太子・皇子俱に薨せぬ」の記述及び継体・欽明期の内乱（安閑・宣化と欽明の二朝並立）に関する諸氏の説を紹介しています。しかし、岡村氏自身は蘇我氏が百済系渡来人であるという仮説をもとに、蘇我氏の影響が薄らいだ天武皇統の中で特に外戚としての蘇我氏の存在が消えた聖武朝においてではじめて新羅系の神である八幡神と新羅王子・天日槍との血縁関係にある

神功・応神を祭ることが出来たとして、蘇我氏百済系勢力から新羅系勢力への政権中枢の変化という視点で問題の説明を試みています。

以上、諸氏の考察をご紹介しますので自身の考察を述べます。

古田史学の会代表の古賀達也氏は「失われた倭国年号」（古田史学の会編・明石書店）のコラム欄で、「宇佐八幡宮連文書に『善記元年に八幡大菩薩が唐から日本に帰ってきて、その後生まれれた四人の子供たちと共に日本を統治した』という伝承が残っている。」と指摘していますが、一方宇佐八幡宮縁起には「造弥勒寺事」の記述の中に「大長大寶年歟（大長大宝年か？）」という記述があります。

最初の九州年号「善記」とともに最後の九州年号「大長」が宇佐八幡宮縁連文書に記されていることから、宇佐八幡宮と九州王朝の強い関係性が窺われます。

岡村氏の限界は、八幡信仰が発生した欽明期に九州王朝が存在していたことを全く念頭に入れていないことにあります。

九州王朝下の九州において応神天皇を神格としてもつ八幡信仰が発生し、それが隼人（九州王朝の残存勢力）征伐の後に『護国』の神としての性格を持った。」という視点で眺めれば、全く別の解釈にたどり着くことが出来ます。宇佐八幡宮の成立に関しては、前期九州王朝（倭の五王・磐井王朝）と協力関係にあった宇佐氏が祀った「比売大神」を出発点とし、磐井

道をゆく (11)

成瀬和之

「伊勢本街道」(五)

倭姫伝説を訪ねてー

の乱の後、新羅系渡来人である辛嶋氏が北九州(福岡県の豊前地方)で発生した「八幡信仰」を持ち込み、更に、後期九州王朝(継体が乗っ取り、宣化の子が筑紫に移って見かけ上継承した九州王朝)の使命を受けた大神氏が八幡神の神格を応神天皇に変えた。という一連の流れで説明出来ます。

「近畿王朝は九州王朝残存勢力の征伐に、九州王朝の精神的支柱である宇佐八幡宮の神官を全面に押し出したのではないか。」それが『隼人征伐後その御霊を祀った』『放生会がまった』という伝承になったのではないか。「近畿王朝は隼人(九州王朝の残存勢力)の征伐後、その(前王朝)の崇りを恐れたのではないか。」「それが聖武による宇佐八幡宮の『護国靈験威力神通大菩薩』への格上げに繋がり、東大寺大仏鑄造後に宇佐宮の禰宜が(宇佐八幡宮が鎮めた前王朝の御魂の代わりに)天皇が乗る紫の輿に乗って大仏を拝したという史実につながったのではないか。」など多くの仮説が浮かびます。これらの仮説については次回もう少し突っ込んでお話ししたいと思います。

二〇一九年七月二五日(木)一五名の参加
一〇時一〇分近鉄大阪線榛原駅集合。
奈良交通チャーターバスで山粕東口バス停へ。

山粕東口バス停の横は「絆の里」の休憩所となっており、鞍取峠(五九〇m)越えをする人のために、無料で杖をかしてくれます。峠を下りたところで返せばよいのです。休憩所の裏手の土橋を渡ると、右手に「南無阿弥陀仏」その左に「いせみちみぎぬ」と刻んだ六字名号碑があります。ここからジグザグの急坂になります。峠は標高五九〇mですが、一気に一二〇m登るから大変です。本街道の難所の一つで、

お伊勢参りして こわいとどこどこか
かい坂 ひつ坂 くらとり坂
つるのわたしか 宮川か

と謳われていました。
登り始めた時は天気が良かったのですが、下り出すと、午前中にもかかわらず「夕立」に見舞われました。石畳になった道のとこが滑りやすく、先頭を歩いていて、転倒して犠牲になった人も出ました。けがに至らずほっとしました。もう少し早く雨が本降りになっていたら、本当

に「こわいとこ」になっていました。

鞍取峠を下りて小さな橋を渡ると左側に、「浄空欣了法師之塔」と刻んだ七一一年の小さな石碑がありました。雨の中、スマホがすぐ濡れ写真を撮るのが大変でした。そこからすぐのところに白髭稻荷神社と休憩所がありました。ありがたい休憩所でみんなして雨宿りです。

休憩所ではカエルの置物が出迎えてくれました。東屋の天井にも面白いものが。昼食時に公民館を開放してもらうなどお世話になるので、幹事さんの一人F君が御杖材役場へのお土産の袋をぶら下げて鞍取峠越えをしてくれたのですが、雨で袋が破れて大変でした。感謝・感謝。雨が小降りになってきたので桃俣から土屋原へと歩きます。平坦な道でしたが、結構長かったです。

土屋原の山側に春日神社がありました。街道筋には春日神社が多いです。大和の国は中世には興福寺の荘園が多く、至る所に春日神社が建てられたのです。春日神社は藤原氏の氏神、興福寺はその氏寺で、大和の国で最も有力な寺であったからです。荘園の領主は有力者に荘園を寄進して土地を守り課税を逃れようとしたのです。境内にはめずらしいラップパイチヨウの巨木があり、みんなで記念撮影しました。このイチヨウは幹が六mもあり、同じ木に普通のイチヨウの葉とラップパイ型のイチヨウの葉が混合している珍しい木

です。皆さん写真撮影に大忙しです。私はスマホのトラブル発生で写真も取れず、しかも、そのケータイに気を取られて杖を置き忘れ、さんざんです。K君とMさんが近くにある昼食場所の公民館まで私の杖を持ってきてくれました。また、感謝・感謝です。
公民館にて昼食をとり、体育館で輪になって三六〇度の全天周画像写真撮影をしました。

昼食後公民館を出発し、堂前の道標と案内標識に従って、国道三六九号線と、ついたり離れたりを繰り返しながら伊勢本街道は進みます。国道沿いにどんどん高度を増していきます。

山道よりアスファルトの国道の方が歩いていて私にはしんどかったです。

桜峠への分岐に道標があり、峠へと向かいますが、未舗装の山道への取り付き口が分かりにくかったです。牛小屋の横に発見しました。上り下り合わせて七〇〇m、ほとんど勾配のない緩やかな峠です。

桜峠を下ったところに案内板があり、そのすぐ横に目を向けると、まるでUF〇のような建物に出くわしました。御杖小学校の円形校舎です。円形校舎とは、ロダンダ(円形建造物)となっている学校の校舎です。一九五〇年代に多数設置され、大阪府・兵庫県・奈良県を中心に北海道から鹿児島県まで全国に広く分布しています。大成建設の設計技師だった坂本鹿名夫氏が考案したもので、風光の出入り

が良く、教室は扇形で教師と生徒の距離が近く教師は全体を見渡せる利点があります。しかし、扇形は多数の机を並べる用途には適さず、ベビーブームによる生徒数の増加に適合できず、一九六〇年代になると新築されなくなり減少していきました。大阪では、清風中学校・高等学校、梅花学園に残っており、我が母校天王寺高校にも一部取り入れられています。

鳥取県の旧倉吉市立明倫小学校の円形校舎は、円形劇場くらしフィギュアミュージアムとしてリニューアルされ、現存するものとしては日本最古で、唯一、一般公開されています。当時の教室が復元されており、小学生の頃を思い出せます。

御杖小学校から、さらに歩くと菅野に入ります。菅野は御杖村の主村であり、ここには御杖村役場があります。前谷を川に沿って歩くと駒繋橋に出ます。橋のたもとには大神宮灯籠と「左いせみち 右はせみち」の道標、説明板があります。

御杖村役場でお土産のお菓子をお礼に渡し、待機していたチャーターバスで榛原駅へ。

おなじみの福寿館で菅谷先生の講演と懇親会です。

伊勢神宮は性格を変えていきます。天皇だけの神社から、多くの国民の祈りも受け止める神社に巾を広げてく経過を、

「大三輪の神の神格の展開」（寺川眞知夫講演録）に基づいて菅谷先生が説明されました。

また、西遊草・清河八郎旅中記や小田宅いえ

子の『東路日記』が紹介されました。幕末になると伊勢詣を口実に全国行脚する人々が増えてきたのです。江戸時代の「鎖国」という条件の下で、小金をためた人々は全国行脚をするようになったのです。今なら海外旅行のようなリクレーションの要素も大きかったのでしょうか。

菅谷先生からは新たな知見を教えてください。ただし、毎回触発されます。

そもそも江戸時代において「国」とは摂津・河内・和泉などであったのですから、「伊勢参り」は鉄道も自動車もない当時としては「海外旅行」のイメージでピツタリでしょう。

ところで、「鎖国」という言葉には「閉ざされた日本」というイメージがありますが、実際には、当時の日本が長崎口だけではなく、対馬口・薩摩口・松前口で外国とつながっていました。そういうわけで私たちが高校時代に歴史で学んだ時から「鎖国」のとらえ方が変化してきました。他にも、「帰化人」から「渡来人」へ、「地理上の発見」から「大航海時代」へ等も歴史のとらえ方の変化した例です。高校を卒業し、半世紀経っているのですから、「学び直し」が必要になっています。

編集後記

転倒して頭をケガして、頭の中がすつきりせず、歩いてもフラフラし、とても走れるような状態ではなかったのですが、介護でギックリ腰になり鍼灸院へいき針をうってもらったらフラつきも直り、走れるようになりました。おかげでビールも飲めるように回復しました。

人間の回復力は、老いてもあります。日にち薬ですね。

【メモ】

誰が空ぞ

こは誰が海ぞ誰が土地ぞ

辺野古・普天間われらがものぞ

この国の空も、この国の海も、そしてこの国の土地も、つまりこの国の領土は、当然のことながらこの国のものだと思っていた。しかし、どうやらそうではないらしい。

普天間基地は、敗戦後の占領下、人々が収容所に押し込められていたとき、米軍の勝手放題で奪われた土地につくられた。今や住民にとって世界一危険な軍事基地となり果てている。米国内はもちろん、世界のどの国においても、こんな危険な基地を置くことは法的にも不可能な代物である。それを「返還」とすると称し、辺野古は、日米政府間の「合意」に基づき民意を踏みにじりながら、向こう二〇〇年間に上の運用を見越して強引に埋め立てられ、巨大基地として建設されようとしている（日本政府は、建設は可能であるという振りをしている）。

日本は扶養家族でないなどと
言われて切れぬ対米従属

日米安保条約とその下にある日米地位協定は、日本の空も海も土地も、

米軍が許さなければ日本のものではなくなることを示している。首都圏の空は、米軍の管制下にあり、従って羽田空港の増便のためには首都の人口密集地の上空を低空で飛行せざるを得なくなるという。

初来日するときトランプ大統領は、まるで占領地に降り立つように、そう言うて悪ければ、まるで国内旅行のように、首都の喉元に置かれた横田基地に専用機で乗り付けたのであった。戦後七十年を越えて、米国にとって日本とはそういう国に過ぎず、米国の扶養家族ではないのだと言つて、すでに負担している世界一の駐留経費と思いやり経費をもっと増やせとまで言い出している。

辺野古基地の建設のため、沖縄の基地負担を本土に分散するとの口実で米軍の演習を受け入れた大分県では、何が起きているか。大分合同新聞二月二十二日付夕刊コラム「東西南北」を紹介しよう。

『あなたに聞きたい。いわゆる「日出生台（ひじゅうだい）」と呼ばれる大地に足を運んだことがありますか？そこで凄絶な星空を見上げたことがありますか？▼辺りに光源のない大草原は、大分県内でも一、二を争うほどに流れ星が降り落ちる。浴びれば世界

観が変わるだろう▼森閑とした夜空に、砲弾がどのように飛び交うか想像できませんか？家々の壁が震えるほどの重低音で発射され、目の前でヒュルヒュルと空を切った後、やがて着弾の音をとどろかせる▼在沖繩米軍が地元ルールを無視し、日出生台演習場で午後八時以降の砲撃を繰り返した。挑発的な夜間の連続発射に続き、揚げ句は年間訓練日数の超過である。日米

合意に反する可能性がある行為は、両国関係を揺るがす信管になる恐れすらある▼懸念の深さは首長たちの声色に表れている。「過去に前例がない訓練の仕方だ」と相馬尊重由布市長。「むちゃくちゃ。あきれて言葉が出ない」とは宿利政和玖珠町長の弁である。広瀬勝貞知事も「極めて憂慮すべき事態だ」と語気は強い▼禄を食む防衛省は地元を見ず、「やむを得ない」「取り決めに違反しない」と大国に手もみをしている。米軍が日出生台で放った無秩序という名の砲弾は、やがて県民と国民の感情を爆発させるかもしれぬ

▼やりたい放題の米軍とそれを追認する日本政府に、県民を代表して大分弁で言わせていただく。「おい、どおくんよ』

「どおくんよ」とは、「ふざける

なよ」のこと（「どおくる」は「ふざける」の意）。「桜見て何が悪いと駄々をこね」、専門家にも諮らず、見境もなく、小・中・高・特別支援学校の全国一斉休校を要請するような権力者がいる国である。

「強きには何度でも言うクソつたれ」、おつとつと、「恥を知れ」。

俳句

土田 裕

ときめきは余生にもあり梅真白
春灯に誘はれて入る酒処
考える葦の足もと地虫出づ
国後は近くて遠し鳥雲に
山笑ふこの街に住み三十年

影山 武司

春立つや古き名刺を庭で焼き
寒明くる明の明星緩びをり
涙目の言訳したる春一番
芽鹿尾菜をもどす厨に潮の香
杜氏洗ふ酒米真白冴返る
酒米の筈に溢るる春の水
唸唸と醪の声や蔵の春
利酒の蠟梅の香に惑はされ
蕎麦打ちの音弾みたり春の風
梅一輪ビルの谷間の地鎮祭